

□ 合唱

保延裕史

本来であれば、2020年の音楽界展望「合唱」の主要なテーマは、ベートーヴェン生誕250年のアニヴァーサリーにまつわる多彩な国内の合唱演奏会と、楽聖のお祝いに例年にも増して訪れる予定の海外の合唱団、指揮者とオーケストラによる華々しい公演の紹介のはずであった。しかし、2019年晩秋から蔓延し始めた新型コロナウイルスによるパンデミックのために、国内、来日音楽家を問わず2月以降すべての演奏活動は停滞を余儀なくされてしまった。ことに国内感染者が増加した4月、政府の緊急事態宣言発出により、「ステイホーム」「自粛」の名の下に国民生活と経済活動は停止、音楽や演劇は不要不急とされ、そのため演奏会の中止や延期が相次いだ。

さらに、飛沫感染を避けるための最大の方策として「密閉」「密集」「密接」が叫ばれ、この点に関して格段に不利な立場にある合唱活動は重い沈黙を強いられることになった。プロ合唱団の公演、オペラ、オーケストラとの共演はもとより、全国規模で行われるNHK全国学校音楽コンクールと全日本合唱コンクールが早い段階で中止が決定され、例年春から夏にかけて行われるアマチュア合唱団の演奏会や合唱フェスティバルも軒並み中止となった。5月の宣言解除後、徐々に演奏活動はリモートワークを含めて手探りの状態から始められたが、合唱については前述した特別な理由ゆえに遅れをとらざるを得なかった。

しかしこの状況にあって合唱関係者はこれまでにない危機感に焦燥しながらも模索を始め、様々な試行を重ねていった。まず、東京混声合唱団はスタッフ、団員の献身的な努力により独自の「歌えるマスク」を開発、このマスクを使って7月31日には延期していた「コン・コン・コンサート2020」を開催（東京芸術劇場）、公演を再開した。同団はオンライン配信や「リモート合唱」を推進する一方、8月には恒例の「八月のまつり」（山下史指揮）、10月に第253回定期（三ツ橋敬子指揮）、12月に第25回いずみホール定期（共演：神戸市混声合唱団、指揮高谷光信）など積極的に聴衆を収容した公演を行った。また、前述の「歌えるマスク」は一般販売され、その後他のメーカーも参入、全国のアマチュア合唱団に普及した。この点で同団は合唱界の牽引役を果たしたと言える。

つぎに、全日本合唱コンクールを主催する一般社団法人・全日本合唱連盟では3月、「新型コロナウイルス感染症に関する注意喚起」、4月に「合唱を愛する皆様へ」というメッセージを發し、6月には「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン」（11月26日には最新第2版）を策定した。この間8月には「合唱活動における飛沫実証実験」（監修：横浜市立大学附属病院加藤英明医師）を行い、全国の合唱団に対して合唱活動再開のために必要な情報を発信し続けた。これらの指針によって10～11月に練習を再開した合唱団は多数に上った。

秋になって政府によるクラシック音楽等のイベント人数制限の緩和を受けて各種の演奏会は手探りながらではあるが完全復旧の途に就いた。特記すべきは「ウィーン・フィルハーモニーウィークインジャパン2020」として、海外からの渡航制限が続

く中ウィーン・フィルが来日し、北九州、大阪、川崎、東京で公演を行ったことで、これは万全な感染防止対策を講じることで外来の音楽家の演奏が可能であり、同時に日本の音楽家の海外での公演も可能であることを実証した例として画期的であった。

積極的な演奏活動という点では創立30周年を迎えたバッハ・コレギウム・ジャパンに注目したい。バッハ作品による記念演奏会（東京、神戸）のほかベートーヴェン・イヤーに合わせた「ミサ曲ハ長調」（11月・第140回定期）、「第九」（12月）（鈴木雅明指揮）、さらに2021年にはオラトリオ「オリブ山のキリスト」の公演が発表されており、着実なレパートリー拡充と演奏内容の卓越性はわが国の合唱に大きく寄与する存在となっている。

さて、年間を通してコロナ禍が私たちの日常に大きな影響を与え、「新しい生活様式」が社会のスタンダードとなった中、それでも極度に鬱屈した社会の空気を少しでも払いのけ、和らげる意味を込めて、ベートーヴェンのメモリアルイヤーの掉尾を飾る年末恒例の「第九」演奏会を実施しようとする動きが秋から本格化した。その最大のネックとなったのが合唱団の問題であり、それをほぼクリアすることで「第九」公演の可能性が視野に入ってきたのであった。厳密な感染予防措置を前提に野ではあるが、元来静かな環境下が当然のクラシック演奏会であれば聴衆に関する感染リスクは低く、また楽器演奏のリスクも数々の実験と夏以来繰り返してきた演奏経験を経て大きな問題は生じなかったことが立証されたが、合唱に関しては飛沫防止や人と人の間隔の確保の点から、マスクの使用や合唱を少数に抑制する必要が確認された。そしてそれらの理由から音量や経験の面でアマチュア合唱団の参加は難しいという判断がなされ、例年多数のアマチュアが参加するイベントとしての「第九」であるものの2020年の多くの「第九」公演は、主としてプロ合唱団による少数の合唱と独唱者の立ち位置の工夫など、感染予防を特別に考慮した形式で行われることになった。

実際の公演では、指揮者が秋山和慶（東響、札響）、飯森範親（日本フィル）、尾高忠明（大阪フィル、東京フィル）、熊倉優（関西フィル）、川瀬賢太郎（名古屋フィル）、小林研一郎（日本フィル）、鈴木秀美（神奈川フィル）、広上淳一（新日本フィル）など日本人指揮者のほか、セヴァスティアン・ヴァイグレ（読響）、ジョナサン・ノット（東響）、パブロ・エラス・カサド（N響）は渡航制限上の隔離期間を経た上でステージに立った。独唱者はわずかながら来日声楽家が参加した以外は日本人声楽家が務めた。合唱団は新国立劇場合唱団（N響、東京フィル、読響、東響）、二期会合唱団（新日本フィル、日本フィル）、東京混声合唱団（名古屋フィル）、東京音楽大学（日本フィル）、コーロ・リベロ・クラシコ・アウメンタート（神奈川フィル）が担当した。

本稿の執筆時において残念ながらコロナ禍終息の見通しは立っていない。しかし、「苦しみを通して喜びに至る」強い意志の力で博愛を音符に刻み続けた音楽の革命家ベートーヴェンの理想を高らかに謳いあげた「第九」が、まさに彼の慶賀すべき生誕250年に、そして私たちの合唱活動にとってかつてない苦難の年の瀬に輝かしく鳴り響いたことの意義はまことに大きかった。古来より人類の生きる証である「歌」とその集合体として昇華した合唱が止むとき、それは音楽文化の死を意味する。私たちは合唱という希望の灯を消してはならない。